

はじめに

学校長 吉川 はる奈

立春を迎え、陽ざしの中に春の訪れを少しずつ着実に感じる頃となりました。おかげさまで、令和5年2月4日、令和4年度 埼玉大学教育学部附属特別支援学校 第50回特別支援教育研究協議会を無事開催することができました。本日ここに、研究集録をお届けいたします。多くの方々の日頃のご指導とご支援に感謝申し上げます。令和4年度は、本校の開校50周年にあたり、研究協議会としても第50回、大変大きな節目の年でした。50年の積み重ねてきた苦労と喜びと大切な意味を明確にしなが、次のステージに歩みをすすめていく模索を全教職員で行っています。

今研究協議会では、記念講演として、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官 加藤宏昭先生に「知的障害教育における各教科等の見方考え方に関して」をご教示いただきました。研究テーマ「児童生徒の確かな学びを目指した授業づくりー各教科等を合わせた指導による学習評価の研究」の1年次の発表であり、「学び、つながり、高め合う機会、研究交流と発信の機会」として充実したものとなるよう、本協議会の場で、有意義な意見交換、研究交流と新たな気づきとステップアップを見出せるよう準備をしておりました。したがって当日に至るまで、埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課学びの支援担当 山崎慎也指導主事、県立学校部特別支援教育課 特別支援学校教育指導担当 但野智哉指導主事、埼玉県立総合教育センター特別支援教育担当 堀口剛指導主事、埼玉大学教育学部特別支援講座 葉石光一教授、名越斉子教授、山中冴子准教授、附属教育実践総合センター長江清和教授、櫻井康博特任教授にもさまざまな形でご指導ご支援いただきました。

開催形式については昨年度のオンライン実施へのご意見もふまえ、本校研究主任三浦駿介教諭を中心に、多くの学校の先生方にご参加いただけるように、それぞれの場、ご都合に合わせて対面参加かオンライン参加を選択いただくよう、今年度はハイブリッド開催といたしました。

本研究集録は、その一部ではありますが、皆様との共有の材料として、お届けするものです。再度、お好きな時間にご自身のペースで確認できる資料としてご活用いただけます。どうぞじっくりお目通しいただき、できればご意見、ご感想など、ご教示いただけますと幸いです

今年度もコロナ禍での学校運営となりましたが、本校は、子どもの自立と社会参加を目指した「体験的な学習」を重視しております。新たな方法、取り組みも行いつつ、大切に1年を進めてまいりました。あらためて学校教育の原点に立ち返り、特別支援教育に携わる多くの先生方とともに子どもたちが『力を発揮する授業』『生き活きと積極的に学習に取り組み、活躍する授業』それぞれが「自分らしく」ある授業を常に目指していきたいと思っております。

結びに、研究協議会の開催にあたり、ご後援いただきました埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、埼玉県連合教育研究会、埼玉県特別支援教育研究会、また埼玉大学坂井学長、堀田教育学部長はじめ関係の皆様、何よりご参会下さったみなさま、そして本校研究主任はじめ、研究企画係他全教職員にも感謝いたします。

目次

○はじめに

○目次

第1章 研究概要

研究テーマ	1
1 研究テーマ設定の理由	2
2 研究テーマ・目的	4
3 研究方法	5
4 研究計画	5
5 カリキュラム・マネジメントとの関連	6
6 今年度の取組	6

第2章 小学部の研究

I 研究概要	9
II 実践報告	12
III 研究のまとめ	30
IV 資料	34

第3章 中学部の研究

I 研究概要	36
II 実践報告	43
III 研究のまとめ	61
IV 資料	67

第4章 高等部の研究

I 研究概要	69
II 実践報告	72
III 研究のまとめ	90
IV 資料	95

第5章 研究のまとめ

1 研究の成果	97
2 今後の課題	100
3 1年次のまとめ	103

第6章 保健教育の研究

I 研究概要	104
II 実践報告	105
III 研究のまとめ	110

○資料 「将来像」、「個別の年間指導目標」、「主体性を引き出す3つの観点」

○おわりに

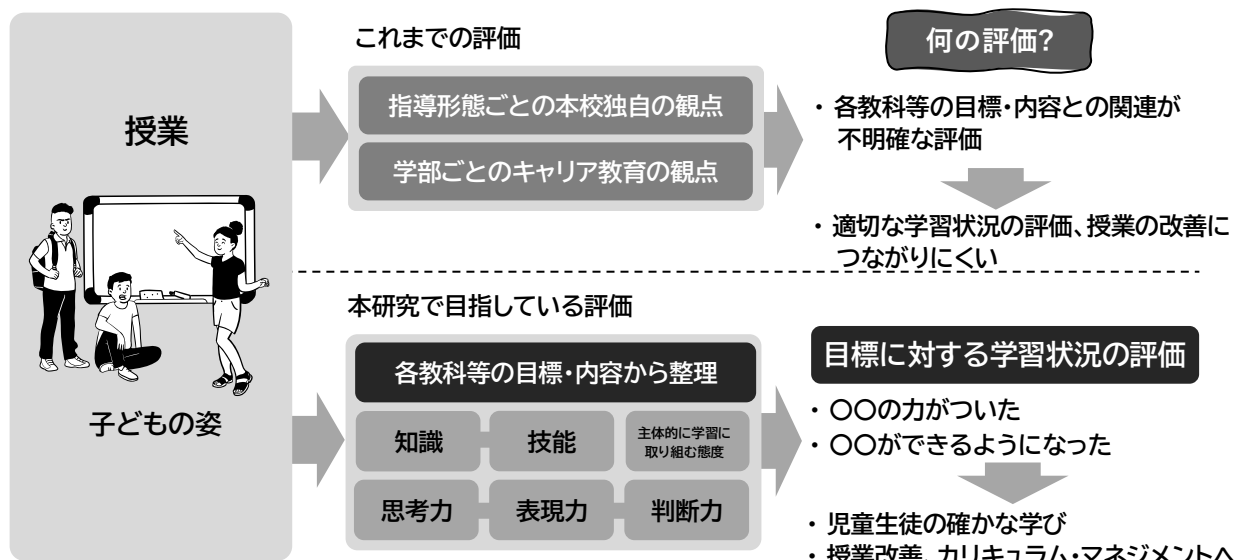
○研究・実践者

第 1 章

研究概要

研究テーマ

児童生徒の確かな学びを目指した授業づくり(1年次) —「各教科等を合わせた指導」における学習評価の研究—



本校は、生活に即した学習や体験的な学習を通し、
一人一人のもてる力を最大限に発現させることによって、
社会の主体としてたくましく生活できる子どもを育てることを目指している。

そのため、教育課程の中心に「各教科等を合わせた指導」を据え、
生活単元学習、作業学習、日常生活の指導、遊びの指導の中で、
児童生徒の主体性を引き出し、共同・協同・協働して学べる授業づくりに取り組んできた。

一方で、「各教科等を合わせた指導」の学習内容が、
教科等の目標・内容とどのように関連し、
児童生徒にどのような見方・考え方が身についたのかについて、
明確にすることはできていなかった。

そこで、「各教科等を合わせた指導」において、取り扱う各教科等の目標・内容を明確にし、
それらの学習評価を改善することが、
児童生徒の確かな学びを育む授業づくりにつながるのではないかと考え、
「各教科等を合わせた指導」における学習評価の研究に取り組むこととした。

1 研究テーマ設定の理由

1-1 特別支援教育の動向

平成 29 年・平成 31 年の学習指導要領の改訂では、学びの連続性の実現に向けて、特別支援学校においても、小・中学校、高等学校と同様に、育成を目指す資質・能力の要素が3つの柱から整理され、各教科等の観点別評価を取り入れることの重要性が指摘された（文部科学省,2017）。これらの背景には、インクルーシブ教育を念頭においた、障害のある子供たちの学びの場の柔軟な選択、子供たちの学習保障がある。

また、中央教育審議会の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2019）では、「子供たちの学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、学習評価の在り方が極めて重要」とされている。特に知的障害教育については「児童生徒の一人一人の学習状況を多角的に評価するため、各教科の目標に準拠した評価による学習評価を導入し、学習評価を基に授業評価や指導評価を行い、教育課程編成の改善・充実に活かすことのできる PDCA サイクルを確立することが必要であるとされている」とある。

知的障害教育においても、児童生徒が身に付けた力を各教科等の見方・考え方から説明することや、取り扱う各教科等の目標・内容の明確化とその学習状況の評価に基づき、授業・指導を評価してカリキュラム・マネジメントを行うこと、子供たちが各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせることを目指した授業改善が求められていると言える。

1-2 本校の課題

本校は、もてる力を最大限に発揮して、自立と社会参加できる子供たちを育てていくことを目指している。そのために、知的障害のある子供たちの学習上の特性から、生活に即した体験的な指導形態として「各教科等を合わせた指導」（以降、「合わせた指導」とする）を教育課程の中心に据えてきた。

また、これまでの学校研究の成果として、全校共通のキャリア教育の視点「将来像」※を設定し、主体性を引き出す授業づくりに取り組んできた。「将来像」につながる指導目標の設定では、個別の指導計画を軸として、実態把握に基づいた目標設定、評価、フィードバックを行い、個々の実態に即した指導・支援の充実を図ってきたことで、児童生徒が生き生きと学習、活動に取り組む姿を見ることができる。

しかし、これまでの授業づくりでは、学習活動が各教科等の目標・内容とどのように関連しているか、その学習活動の中で児童生徒がどのような各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせることを目指しているのかを明確にしてこなかった。特に「合わせた指導」の学習活動においては、「生活に即した」「体験的な」という活動内容や方法に対する工夫が多く、その学習活動でどのような教科等の目標・内容を扱っているのか、その目標・内容についてどのように評価するのかという部分に意識が向けられることは少なかった。

また、授業における児童生徒の評価について、これまでは指導形態ごとに独自の観点を設けたり、キャリア教育の観点から個々の成長を評価したりすることを重視してきた。そのため、児童

※将来像…本校のキャリア教育の視点。児童生徒が23～25歳になったときに自分の力を最大限に発揮し、生き生きと生活している様子を「家庭・職場・余暇」の3つの場についてそれぞれ考えるもの

生徒が授業を通して習得した力を各教科等の特質に応じた見方・考え方との関連から整理することや、学習指導要領の各教科等の目標・内容との関連から児童生徒の学習状況を把握することはできていなかった。



図1 各教科等の目標・内容との関連が不明確な「合わせた指導」の評価

これらのことから、本校の「合わせた指導」の授業づくりにおいて、学習活動の中で取り扱う教科等の目標・内容の明確化、学習評価の改善が必要だと考えられた。

学習活動の中で取り扱う各教科等の目標・内容を明確にすることは、その授業で目指す児童生徒の姿を明らかにし、どのようにその姿に導くかという指導・支援の目的の明確化にもつながるだろう。また、各教科等の特質に応じた見方・考え方、3観点に基づいて学習評価を行うことで、児童生徒の学習状況を多角的に、適切に把握することができるだろう。さらに、その学習評価に基づいた指導の評価は、次時以降の学習活動の設定、指導・支援等の充実につながることが期待できる。

「合わせた指導」における学習内容の明確化と学習評価の改善、また、それらを踏まえて授業づくりの考え方を整理し見直すこと、さらに学習評価に基づく授業改善のサイクルを確立することが、児童生徒の「確かな学び」を育む授業づくりにつながるのではないかと考えた。

2 研究テーマ・研究目的

2-1 研究テーマ

児童生徒の確かな学びを目指した授業づくり(1年次) —「各教科等を合わせた指導」における学習評価の研究—

社会の変化に応じて、子供たちがたくましく生きていく力を身につけていくために、知的障害教育において「確かな学び」を育む「各教科等を合わせた指導」の授業づくりについて、本研究がその一端を示すことによって、それぞれの学校の子供たち、ひいては全国の特別支援教育の向上に資する研究になることを願い、研究テーマを「児童生徒の確かな学びを目指した授業づくり」、1年次の副題を「『各教科等を合わせた指導』における学習評価の研究」とした。

2-2 研究目的

「各教科等を合わせた指導」において、学習内容の明確化、学習評価の改善・充実を図り児童生徒の確かな学びを育む授業づくりを行う。

本研究で目指すのは児童生徒の「確かな学び」を育むことのできる授業づくりである。「確かな学び」について、学習指導要領では「確かな学力」とされているが、本校では「学力」に限らず、学び方、学ぶ過程、ともに学ぶ仲間や相手、環境の活用等も含めて大切にすることを意識するために、「確かな学び」とした。

本研究では、「合わせた指導」の学習内容の明確化、学習評価の改善・充実に取り組み、それらを踏まえて授業づくりの考え方を整理し見直すことで、児童生徒の確かな学びを育むことのできる授業づくりを行うことを目的とした。

2-3 1年次の研究目的

「各教科等を合わせた指導」の1単位時間の授業において、学習する各教科等の目標・内容を明確にし、それらに対する学習評価のあり方を探る。

本校で実施している日常生活の指導、生活単元学習、作業学習といった「合わせた指導」では、児童生徒の発達段階や興味関心、生活上の課題等に応じて、単元ごとにさまざまな教科等の目標・内容を扱っていると考えられた。

今年度は1単位時間の授業に焦点を当て、その学習内容を学習指導要領における各教科等の目標・内容との関連から分析・整理し、明示することとした。また、その目標・内容の評価規準の設定から評価までの流れと考え方を整理し、明らかにすることを目的とした。

3 研究方法

学習活動の中で取り扱う各教科等の目標・内容の学習指導要領との関連、その目標・内容についての評価規準設定の過程について、その道筋を明らかにするために、分析や検討の枠組みとなる「フレームワーク」を作成した。

そして、作成したフレームワークを用いて授業の学習内容の分析・整理、評価規準を設定し、授業実践を行った。その授業実践の結果を踏まえて、フレームワーク自体の改善・修正を行い、1単位時間における「合わせた指導」の学習評価の考え方、方法について考察した。

4 研究計画

本研究では、表1に示した3つの段階を設定し、学習内容の明確化、目標・評価規準の設定、授業づくりの考え方を整理・見直すことで、児童生徒の確かな学びを育む授業づくりを目指すこととした。

1年次には「1単位時間の授業における学習内容の明確化と学習評価のあり方」、2年次には「単元を通じた学習内容の明確化と学習評価のあり方」、3年次には「学習内容の明確化と学習評価を踏まえた単元計画・評価計画に基づく授業づくり・実践」という段階に分けて、各段階での取り組みと成果を次の段階につなげていく。また、各段階で必要となる視点や考え方を整理し、分析と実践による妥当性の確認を行うために、研究期間を3年研究とした。

表1 本研究の取組内容と流れ(予定)

1年次 (今年度)	<p>1. 学習内容を分析・整理し、フレームワークの作成を通じて以下の内容に取り組む。</p> <p>(1) 「合わせた指導」の1単位時間の授業について、学習内容を各教科等の目標・内容との関連から分析・整理する。</p> <p>(2) (1)を踏まえて、授業の学習内容の整理、目標・評価規準を設定する過程とその考え方の枠組みとなるフレームワークを作成する。</p> <p>2. フレームワークを用いて授業を実践し、以下の内容に取り組む。</p> <p>(1) フレームワークを用いて、学習内容として取り扱う各教科等の目標・内容の整理及び、評価規準の設定を行う。</p> <p>(2) (1)のフレームワークを基に、授業を実践する。</p> <p>(3) (2)の結果を踏まえ、1単位時間の学習内容の整理の仕方、評価規準の設定の仕方、フレームワーク自体の見直し・改善を行う。</p> <p>3. 1単位時間における「合わせた指導」の学習評価の考え方を整理し、まとめる。</p>
2年次	<p>1. 単元を通じた学習内容の整理、評価規準の設定の仕方を検討し、単元計画・評価計画の作成方法について検討する。</p> <p>2. 授業実践を通して単元計画、評価の検証、改善を行う。</p> <p>3. 単元を通じた「合わせた指導」の学習評価の考え方を整理し、まとめる。</p>
3年次	<p>1. 1・2年次の成果を踏まえて、単元計画・評価計画の作成・授業実践を行う。</p> <p>2. 授業実践を通して、「合わせた指導」の授業づくりにおける学習評価のあり方を整理し、まとめる。</p>

5 カリキュラム・マネジメントとの関連

本研究では、「合わせた指導」の学習評価を焦点化するために、研究目的に「カリキュラム・マネジメント」という言葉を含めなかった。しかし、学習評価、指導の評価に基づく授業改善は、カリキュラムの見直し・改善というカリキュラム・マネジメントの側面をもつ。本研究における成果は、結果的に本校のカリキュラム・マネジメントにもつながるものであると考ええる。

また、授業における学習内容、学習評価についての研究は、教育課程の編成・実施と密接にかかわるものである。本研究の研究過程においては、現在の教育課程上の課題の発見や、課題に対する解決策の提案なども行われた。

学校研究では、現在行っている授業実践を起点として、1単位時間の学習評価の改善、さらには単元の指導計画・評価計画へと発展させ、授業づくりの考え方を整理・見直していく。一方で、教育課程については、教育課程検討委員会がその見直しと改善に取り組み、学校教育目標と目指す子ども像、授業計画、各書式等の整備といった教育の全体計画にかかわる教育課程の編成・実施という観点から、授業改善へとつなげていく。本研究と教育課程の見直し・改善は、それぞれ逆向きのアプローチを行うことになる（図2）。

本研究で得られた成果を教育課程に反映し、見直し・改善が図られた教育課程に基づき、さらに研究を進める、このような学校研究と教育課程の見直し・改善を両輪として、本校のカリキュラム・マネジメントを推進していくことができると考える。

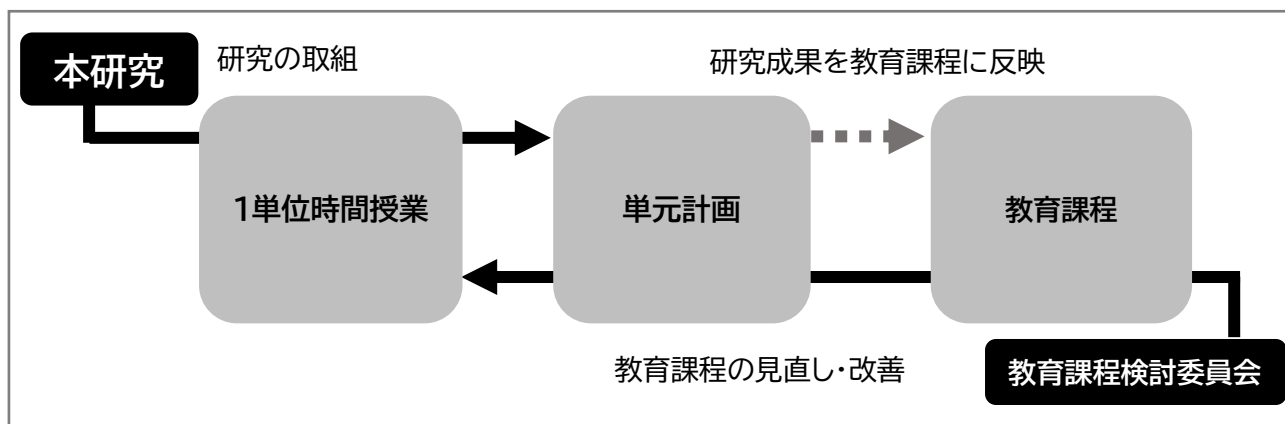


図2 本研究と教育課程改善のアプローチ

6 今年度の取組

6-1 フレームワークの作成

研究1年目にあたり、まず、各学部で「合わせた指導」で取り扱っている各教科等の目標・内容の分析を行い、課題の共有を図った。その過程で、学習活動として「取り扱う」とはどういうことか、個々の段階に合わせて評価規準を設定するとはどういうことかなど、各教科等の目標・内容との関連、評価の考え方について共通理解を深めた。

また、取り扱っている各教科の目標・内容を分析・整理する過程、目標・内容から個々の評価規準を設定する過程で、明確化する必要がある内容や考えを枠組みとして示す「フレームワーク」を作成した。各学部のフレームワーク作成の経緯や各項目の意図、具体的な内容については各学部の章で説明している。

この学習内容、目標・評価規準を明確化するフレームワークは、各学部の授業の実態や課題に基づいて検討・作成したため、学部間で共通する部分と相違のある部分が見られる。今後、全校で行う研究会議等を通して、共通する内容をおさえ、全校で共通のフレームワークを作成していきたいと考えている。

また、本研究では学習活動の中で取り扱う各教科等の目標・内容を「学習内容」と呼んでいる。学習指導要領に倣えば、本来は「指導内容」とするところだが、本研究では、「合わせた指導」において、児童生徒が何を学んでいるかという「児童生徒の学び」の視点から学習活動の分析を始めた。そのため、児童生徒が主語となる「学習内容」という言葉を用いているが、その意味するところは「指導内容」と同じである。今年度は「合わせた指導」における児童生徒の学びの見取りに重点をおいたが、今後、研究を進める中で、学習評価に基づく授業づくりへと発展し、「学習内容」をどう組み立てていくかに重点がおかれれば改めて「指導内容」としていこう。

6-2 フレームワークを用いた授業実践

小学部・中学部は生活単元学習、高等部では作業学習を取り上げ、各学部のフレームワークを用いて、特定の1単位時間の授業について、学習内容の整理、目標・評価規準の設定、授業実践を行った。

実践の内容や結果は各学部の章を参照されたい。それらの実践結果をもとに、各学部でフレームワークを用いて学習内容の明確化、学習評価を行ったことに対して省察し、フレームワーク自体の改善・修正を行うとともに、「合わせた指導」の1単位時間における学習評価の考え方、方法について考察した。

6-3 今年度の指導・助言者

小学部	埼玉県教育局 市町村支援部 義務教育指導課 学びの支援担当	指導主事	山崎 慎也	様
	埼玉大学教育学部 特別支援教育講座	准教授	山中 冴子	様
	埼玉大学教育学部 附属教育実践総合センター	特任教授	櫻井 康博	様
中学部	埼玉県教育局 県立学校部 特別支援教育課 特別支援学校教育指導担当	指導主事	但野 智哉	様
	埼玉大学教育学部 特別支援教育講座	教授	葉石 光一	様
	埼玉大学教育学部 附属教育実践総合センター	教授	長江 清和	様
高等部	埼玉県立総合教育センター 特別支援教育担当	指導主事	堀口 剛	様
	埼玉大学教育学部 特別支援教育講座	教授	名越 斉子	様

6-4 今年度の研究活動の経過

月	研究に関する主な活動
	○ 第1回 研究会議 ：研究テーマ、研究目的、今年度の研究についての確認
4	○ 第2回 研究会議 ：研究協議会の開催方法に関する提案・検討、各学部の進捗状況報告
8	○ 研究研修 山中冴子 様（埼玉大学）
9	「教科等を合わせた指導 生活単元学習について」
10	○ 第3回 研究会議 ：各学部の研究の取組について中間報告
10	○ 外部指導者による学部研究指導
	小学部指導者 山中 冴子 様（埼玉大学）、山崎 慎也 様（県教委） 櫻井 康博 様（埼玉大学）
	中学部指導者 長江 清和 様（埼玉大学）、葉石 光一 様（埼玉大学）
	高等部指導者 名越 斉子 様（埼玉大学）、堀口 剛 様（県立総合教育センター）
	中学部指導者 但野 智哉 様（県教委）
11	○ 研究研修 長江 清和 様（埼玉大学）
12	「『新しい時代の特別支援教育』を踏まえた知的障害教育の専門性とは」
2	○ 「第50回 特別支援教育研究協議会」対面/オンライン ハイブリッド開催
3	○ 「研究集録第51号」発行及び配付
	○ 第4回 研究会議 ：今年度の研究のまとめと来年度の方向性の提案・検討

<引用・参考文献>

文部科学省.特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）.海文堂出版.2019

丹野哲也.新学習指導要領等を踏まえた教育の展開－特別支援教育の推進とさらなる充実の視点から－.平成29年度国立特別支援教育総合研究所セミナー 基調講演 要点記録.2017
<http://www.nise.go.jp/nc/wysiwyg/file/download/1/1561>

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会.児童生徒の学習評価の在り方について（報告）.2019
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2019/01/23/1412838_1_1.pdf

笹原雄介 山元 薫.知的障害特別支援学校の校内研究における資質・能力の捉え方と学習評価の実施状況に関する調査.静岡大学教育実践総合センター紀要.2018

松見和樹.知的障害教育における学習評価の現状と課題－特別支援学校(知的障害)が作成した研究紀要,実践記録等の検討から－.国立特別支援教育総合研究所研究紀要 第43巻.2016

尾崎雄三.知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究－特別支援学校（知的障害）の実践事例を踏まえた検討を通じて－.国立特別支援教育総合研究所 専門研究 B-295.2015
<http://www.nise.go.jp/cms/7,10812,32,142.html>